夜

金石範

文藝春秋

Printed in Japan

夜

昭和四十八年十月十五日　第一刷

著者　金石範

発行者　樫原雅春

発行所　株式会社　文藝春秋
(一〇二)東京都千代田区紀尾井町三
(〇三)二六五―一二一一

印刷　凸版印刷

製本　矢嶋製本

定価　八五〇円

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

0093―302940―7384

夜

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

夜　目次

夜……5
トーロク泥棒……49
李訓長……117

装幀　田村義也

題字　平　文徵明
　　背　黄庭堅

夜

一

母の葬式の日は雨だった。

母が死んでからもう一年余になるが、火葬場の建物の内部の様子が雨の向うにいまでも見えるのだ。その雨の日の光る雨脚を透かして、死体焼却炉のまえに屯する会葬の人々や隠坊の姿が見える。もちろんその中には私も立っているのだった。私は歳末の商店街の明るい雑踏を行きながら、いまや雨以外の母の葬式の日を思い出されないその置き換えのきかぬ記憶の重さにおどろく。それはもう塗りつぶしのきかぬ完成された一枚の絵と同じ確かさを持っているのだ。

その雨の日は不思議にあるにおいの記憶を私にもたらすのだった。建物の内部に流れこむ湿気を含んだ冷たい空気が、何ものかのにおいを包んで長いあいだ逃さないでいるように思われた。

三日降りつづけている冷たい雨は、火葬場の構内の通路になった敷石の両側に拡がった地面を水びたしにして、曇った空を映していた。霊柩車がバックして入ったあとの轍が深くえぐれていて、泡立つ水溜りをつくっていた。建物の内部のにおいがやや生臭いように思われた。雨天のせいかも知れない。濡れた空気が建物の入口に押しよせ内部の乾燥した空気と混ざり合っているせいかも知れない。いや、じっさいは余熱を放つ焼却炉のあたりは湿気らしきものはないのだから、生臭いものがあるはずもなかった。

黒くすすけた周りの壁々は太陽の直射に長くあたっていたように、熱を抱いているようでさえあった。その乾いた壁の奥深くしみこんでいる火葬場の古いにおいは、たしかに吐気をもよおすものを持っているはずだが、それでもなお何となく魂を引きずりこむような安らかさをも伴っていた。そして私は、私を包みこんでくるあらゆる物体の表面に、やわらかく毛ばだつものを感じ、そのところどころに死者たちの息吹きの跡を見た。私はその息吹きを見て、そこに生臭いにおいを嗅いだのかも知れないのだった。

私は首を倒して高い天井を見た。古ぼけた工場の高い屋根裏天井のようなそこには、弱燭光の汚れた裸電球がぼんやりとぼっていた。天井は暗くふかぶかとして何か底がないようであり、す

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ぐには形の見分けがつかない。やがて、すすけて真っ黒になった凹凸のはげしい高い壁が天井に接して眼に入ってきた。そこには無数の嬰児の大きさを持ったざらざらで粗雑な仏像ようのものがつぎつぎに浮び出てきた。地蔵にも似たその同じ形につくられた合掌した姿の肩からは、毛髪のように長いいくつものすすが垂れ下って風のないのに揺れていた。焼却炉の余熱がのぼるのだろう。この種の仏像は火葬場の構内の石塀の上にも何段となく立ち並んで石塀をいっそう高くして雨曝しになっているが、それは死者を焼いたあとの灰にセメントを混ぜてつくるというものであった。

母は病院で死んだのだった。工場に電話連絡があり（工場といっても主人夫妻と工員三人の小さい町工場にすぎない）、病院へ行ったときはすでに意識はなくなっていて、その魂は息子を見るまえに死んでしまっていた。で、私は老母の息を引き取る光景を見ただけなのだ。その最後の息を引き取る直前の、意識不明になりながらまるで爪でガラスを引っ掻くように救いを求める、おそらく生者の眼には永遠に映ってこない暗闇にひたった臨終の苦しみを、それからまもなく訪れた静かな死顔をじっと見つめていただけであった。まもなくやって来た工場の主人の細君は、彼女は蘭女（ランニョ）というなかなかいい名前を持つしかし気の強い女なのだが、母の死顔を見て仏のようだと泣いた。

未来のない時間を不確定に刻みながら喘ぎつづけるのを、ただじっと見ているのはまことに気

づまりなものである。人は愛するものの死を悲しみながらも、死神の必要以上の遅刻にはがまんができない。臨終の場にいるものはだれでも、まだかまだかという死への期待を秘めているものだ。私はその瞬間の自分のためだけにでも早く死神がやってくればと、ごく自然に思っていた。医者や看護婦にしても早い方がいいにきまっている。私は自分もいっしょになって臨終の場の沈黙にひたっているのが耐えがたかった。ふたたび病室に入ってきた若い痩身の、まるでインターンのような頼りなさそうな医者に、母は何もいわなかったのかと訊いたが、いってしまってからすぐに後悔した。母に遺言があるはずがなく、それに日本語がろくにできないからだ。母は私のまえでもひたすらに朝鮮語で、自分を連れていかないでくれ、自分を連れていかないでくれと、臨終の闇の中で虚空をつかみながら喘いでいただけだった。すでに生者の眼には見えていない死神がその枕元に坐っていたのだ。医者の代りに背の高い不美人の看護婦が遺言はなかったといった。なぜ、医者は黙っているのだ。いや、彼は何も知らないからだろう。私は彼らが母の死よりも私の油だらけのナッパ服を意識しているのではないかと思い、そんなものだと思いながら、医者というものはだいたいその手と同じような表情をしているものだと感じた。手の表情が読みとりにくいように医者の表情は分らない。その若い医者の手が機械の先端のようだと感じたせいか、彼が白衣を着た機械のように見えてきた。

私は患者の死をまえにした医者や看護婦くらいの落着きを持って母の死をながめた。火葬場へ

雨の中を死体を運んで行ったときも同じことであった。それはことさら自分で歯を食いしばるような悲壮感をあおったわけでもなかった。また葬式をすませてしまえば、何となく吸い取られるようにしてその足でおもむいてしまうような女がいて、その軀に深くめりこむための想像をしていたせいでもなかった。たしかに私はちらっと、突然奈落に落ちてゆく私をその暗い穴ぼこで受け止めてくれる女がいればと思ったのは事実だが、そんな女はいなかった。それに私はかりに奈落に落ちたとしても女の救いを求めはしないだろう。

その日は死体焼却炉の四角い穴の中へ棺を押しこんだ。線香のにおいの漂う中で、会葬者のようにきちんとネクタイを結んだ葬儀屋のつやつやした顔の中年男が、十人ほどの会葬者にふかぶかと頭を下げた。そして夜店の店じまいのような調子でいった。

「さあ、みなさん、これでおしまいでございます。よろしゅうございますか。仏さんに最後のお別れをしてあげて下さいませ……ではよろしゅうございますな、それではお別れでございます。フタが閉まります」そして必要のない言葉をさらにつけ加えた。先刻まで大阪弁で同僚と騒がしく話していた男だった。「どうも、みなさんご苦労さまでした。わざわざ雨の降る中をみなさんまことにご苦労さまでした」

会葬者の中の一人の老婆が、葬儀屋のそれくらいの日本語の意味は解せるのだろう。独り叩頭して合掌しながらぎこちない日本語で、ありがとうございます、と幼児的な発音でつぶやくその声

を私は左横の方に聞いた。私は、葬儀屋へのその屈折のない反応がなぜか気にさわった。お通夜の疲労のせいかも知れない。やがて、ガチャンと鉄が鉄を噛む音がして、棺とその周りに半円を描いて立った会葬者とのあいだに立ちはだかった年とった隠坊が、手慣れた手つきで鉄扉を閉めた。たしかに、これでおしまいだというわけだ。

隠坊はやや猫背であったが、ずんぐりしていて首筋も太く見るからに頑丈そうだった。その人を正視しないうつ向きかげんの姿勢が癖になってしまって猫背になったのかも知れない。彼は通るとき、ごめんともいわずその得体の知れぬにおいのする軀ごと人をよけさせた。きちっとタワシのように揃えた角刈りの半白の頭が印象的だった。しかし、顔の色は赤黒くにごり皮膚がごつごつしていて醜い感じだった。まともに視線が合わぬのに私は内心ほっとしたが、それがその容貌をいっそういびつで何かいやな感じのものにしていた。その紫に近い顔の色は焼却炉の炎の反射熱のせいだけではなく、ひどい酒焼けの色にちがいない。私は知人の死に出会い、二、三度他の火葬場へ会葬者として行ったことがあるが、不思議にこのときの隠坊の表情がよく似ているのに気づいた。それは皺の内側にたたまれた淫らな顔だ。それは隠微で、しかもその奥の深い暗さの中に大きな根を張った何か荒淫の相があるのだった。

これらの隠坊への心情は、深いところで私がそこから顔をそむけようとするものに繋がっていた。私はふと、これはわが同胞じゃないかなという思いがした。しかし、顔でそこにある朝鮮人

を見出すのはもはやむずかしい。隠坊という存在の持つ顔にはすでに類似なものができあがっていて個的なものは消えてしまうようにさえ思われる。だいたいそういう考えは避けたい。私は頭痛がしていて、そんなことをいま考えるのはいやになったが、するとこの火葬場のできたときの隠坊は（いつごろ火葬場が建てられたかは知らぬが、もう何十年にもなるだろう）朝鮮人だったという、だれかの話を思いだしてしまったのだから仕方がなかった。ふと老人を朝鮮人じゃないかなと思ったのは、その記憶のせいなのだろう。そのせいにしたい。

鉄扉を閉め終った老人はむっつりした表情で、焼却炉の横のすすけた煉瓦壁の暗い曲った通路を奥の方へ消えて行った。彼が去ったあと、ふたたび念仏が老婆たちによってはじめられた。

私の心は何か迷路のような感じのする暗がりに消えた老人のその足跡を辿っていた。それは私の追跡から逃れてくねくねした秘密の通路を、独り意味のないしかしいまや自由な笑いを浮べてへらりへらり駆けていた。彼は内心チップをくれなかった私を軽蔑していることだろう。私は金持の知人の葬式で、チップを手にした中年男の隠坊が小躍りせんばかりに叩頭してたちまち姿を消したのを思いだした。私は何の脈絡もなしに、鮮血したたる茶褐色のつややかな牛の肝臓の像が眼のまえにぶら下るのを見た。それはでっかい大きさの取りたてたばかりで湯気の立ちのぼるやつだった。老人の赤黒い顔から牛の肝臓という妙な連想をしたのか、それともすぐ惹き起されたある一つの昔話の思い出のための前触れだったのか、それは分らない。私はそのときだれから

となく聞いたことのある昔の、もうずうっとまえの戦前の話を思いだしていたのだった。やはり、朝鮮人の隠坊のことを思いだしてしまったのだった。

朝鮮人の隠坊のところへ一人の癩病患者が訪れた。業病を持たされたその朝鮮人の男は、まだ焼かれずに残っている死体の肝臓を切り取ってくれとたのみこんだというのだった。人間の生まの肝臓を食べれば癩は癒るというのだ。死体焼却の跡から、金の入歯などを事前により出してしまうのも隠坊の役得の一つだろうが、この世界を包んだ巷間では、たとえば骨を粉末にしたり人体を焼いたあとの黒いすすを飲めば肺病が癒るとかという迷信がいまでも生きているのである。しかし、そのことと死体を切り開いて肝臓を取り出すこととは問題が異なるといわねばならない。私はそれの売買が成立したかどうかの真相は知らない。いや、それはだれも知ることはできないだろう。知ってはならないことかも知れない。ただ、私には深夜の火葬場の中の売買の取引をする光景の想像がやりきれないのだ。降りそそぐ重油の中でごうごうと音をたてて死体の燃え上る焼却炉の裏側で火熱にほてりながら、ひたすら死者の肝を望むレプラ患者と隠坊という一対の存在がある。周りの壁に大きく揺れて躍るその影の緊張のイメージがやりきれない。それは私のいま立っている地面につづく焼却炉のどこか裏側のあたりで、じっさいに行われたかも知れない現実の人生の断片とは思われないのだ。もちろん専制暴君ならば、棺を暴く必要もなく生者の肝を切れと命ずれば足りるだろう。しかし、それとこれとは論理の秩序がちがうのだ。隠坊と癩病者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com